

浜松市における障がい児者の生活を支える地域体制づくり ～地域生活支援拠点を通して～

平成30年度 第一回基幹相談支援センター 研修会を開催しました。

障がい児者の重度化・高齢化や「親なき後」を見据え、居住支援のための機能（相談、緊急時の受け入れ・対応、体験の機会・場、専門的人材の確保・養成、地域の体制づくり）を地域の実情に応じた創意工夫により、障がい児者の生活を地域全体で支えるサービス提供体制を整えた地域生活支援拠点等の整備について、第5期障害福祉計画（平成30年度～32年度）では、平成32年度末までに「各市町村又は各障害保健福祉圏域（以下、「市町村等」という）に少なくとも一カ所の整備」を基本としています。

しかし、厚生労働省調査によると、その全国的な整備状況については、平成29年9月時点において42市町村、11圏域（全国…208市町村、63圏域）に留まっており、各市町村等においては、必ずしも整備に向けた取り組みが進んでいません。このような状況のなか、浜松市では地域生活支援拠点等の整備について、第4期浜松市障がい福祉実施計画（平成27年度～29年度）に「平成29年度末までに1個所を整備することを基本とする」旨を明記し、この度、平成30年4月1日から浜松市障がい者基幹相談支援センターにおいて、基幹相談支援等業務（地域生活支援拠点事業、基幹相談支援センター事業）を実施することになりました。

研修会を開催しました。

本研修会では、講師として清水明彦氏（西宮市社会福祉協議会常務理事）をお招きし、西宮市が独自で行う「本人中心支援計画」（本人を囲んで関係者が一堂に会し、本人主催の本人中心支援会議を開催。本人の希望に基づく本人中心支援計画）を策定することで、地域の中で本人が持ついくつもの社会的役割を果たしていくための支援が可能になるとお話しをいただきました。

また、シンポジウムでは、小出隆司氏（浜松市浜松手をつなぐ育成会 会長）、大石直弘氏（天竜厚生会 施設サービス課長）、松本淳一氏（浜松市役所 障害保健福祉課）、雨宮寛氏（浜松市障がい者基幹相談支援センター 所長）にご登壇いただき、80万都市である浜松市における「障がい福祉圏域」をどのように捉えるのか、そのうえで地域の声を反映させた地域づくりをどのように進めていくのか、等について熱いお言葉をいただきました。

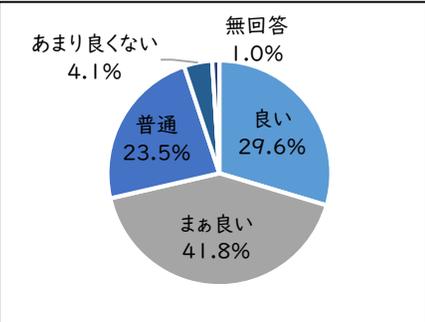


代表者挨拶を行う稲松義人氏（小羊学園 理事長）

アンケート結果（概要）

- ・参加者計：131名
- ・アンケート回収数：98件（回収率：74.8%）

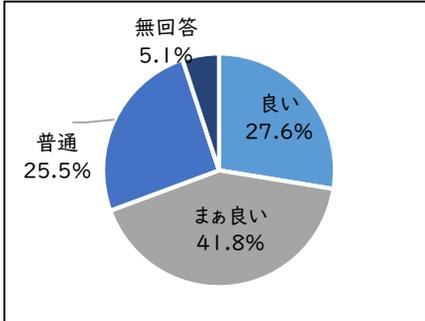
【講義内容について】



＜自由記述（一部抜粋）＞

- ・アセスメントの在り方について考え、本人中心の支援会議から出た課題を地域レベル（協議会）の取り組みとして共生のまちづくりにつなげていくことが大切。
- ・障害のある人を支える（ともに生きる）の根本、原点を感じた。福祉サービスだけではなく、住民とともに生き支え合う体制、地域住民の一人になることが大切と感じた。
- ・本人の計画づくりが市民全員の共生のまちづくりにつながることを理念としていること。浜松市もそのような街づくりを目指したい。

【シンポジウムについて】



＜自由記述（一部抜粋）＞

- ・地域生活支援拠点に大切なことは、「地域でどんな障害があっても生き生きと生活できる」ことであることが理解できた。
- ・浜松の福祉文化は施設入所中心から始まっていることを改めて感じた。どの施設へ入所するかではなく、誰とどこで住むのかという言葉が印象的だった。